

03 SNSで加害者にならないために（インターネット）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、高木悠未がお届けします。今日のタイトルは「SNSで加害者にならないために」です。

ネット空間における言葉の暴力は、人を深く傷つけ、時に命までも奪います。SNSで手軽に情報発信できる今、誰もが被害者にも加害者にもなる可能性があり、深刻な問題となっています。

東京都の開成中学校では、2021年に「ネットの誹謗中傷」を国語の授業で取り上げたことが、話題になり本も出版されました。熱意ある授業をした神田邦彦先生にお話を伺いました。

【神田さん役】SNSの誹謗中傷を見ると、「自分はこんなひどいことをするはずがない」と誰でも思います。加害者となってしまった人も、誰かを傷つけるつもりはなかったかもしれません。この問題を自分事として考えるには、スマホの特性や人間の心理を理解する必要があると思います。

例えば、ネット上の誹謗中傷と、手紙や喧嘩はどう違うの

25 か。「手紙は手間暇がかかる」「喧嘩は自分も傷つく」など、生徒からたくさん意見が出ました。

30 「スマホにはプライベートの情報が入っていて体の一部のような感覚だから、頭に浮かんだことをつぶやいてしまう」という発言は、印象に残っています。さらに、投稿に「いいね」がつくと承認欲求が満たされ、歯止めがきかなくなっていく。いかにスマホが手軽に人を攻撃できる道具になり得るのか、対話を通してみんなが気づいていきました。

35 2020年に誹謗中傷を受けて自殺した木村花さんの事件で、遺族がネット上で攻撃された話をしたときのことです。生徒から「遺族を攻撃するなんて、意味分かんねー」と声が上がり、ドキッとなりました。見方を変えれば、意味が分かる誹謗中傷もあることを表しているからです。「悪いことをした人なら、責められても仕方ない」と思っていないだろうか。生徒の何気ないひと言が、正義感の危うさについて議論を深めるきっかけになりました。

40 (ナレーター) 現代のネット社会では、被害を完全に無くすのは困難です。けれど、「私たちが加害者にならないように気をつけることはできる」と神田先生は言います。

45 「自分もやってしまうかもしれない」と危機感を持ち、画面の向こうの人を意識することが、一線を越えないブレーキになるのです。

(本文941字)